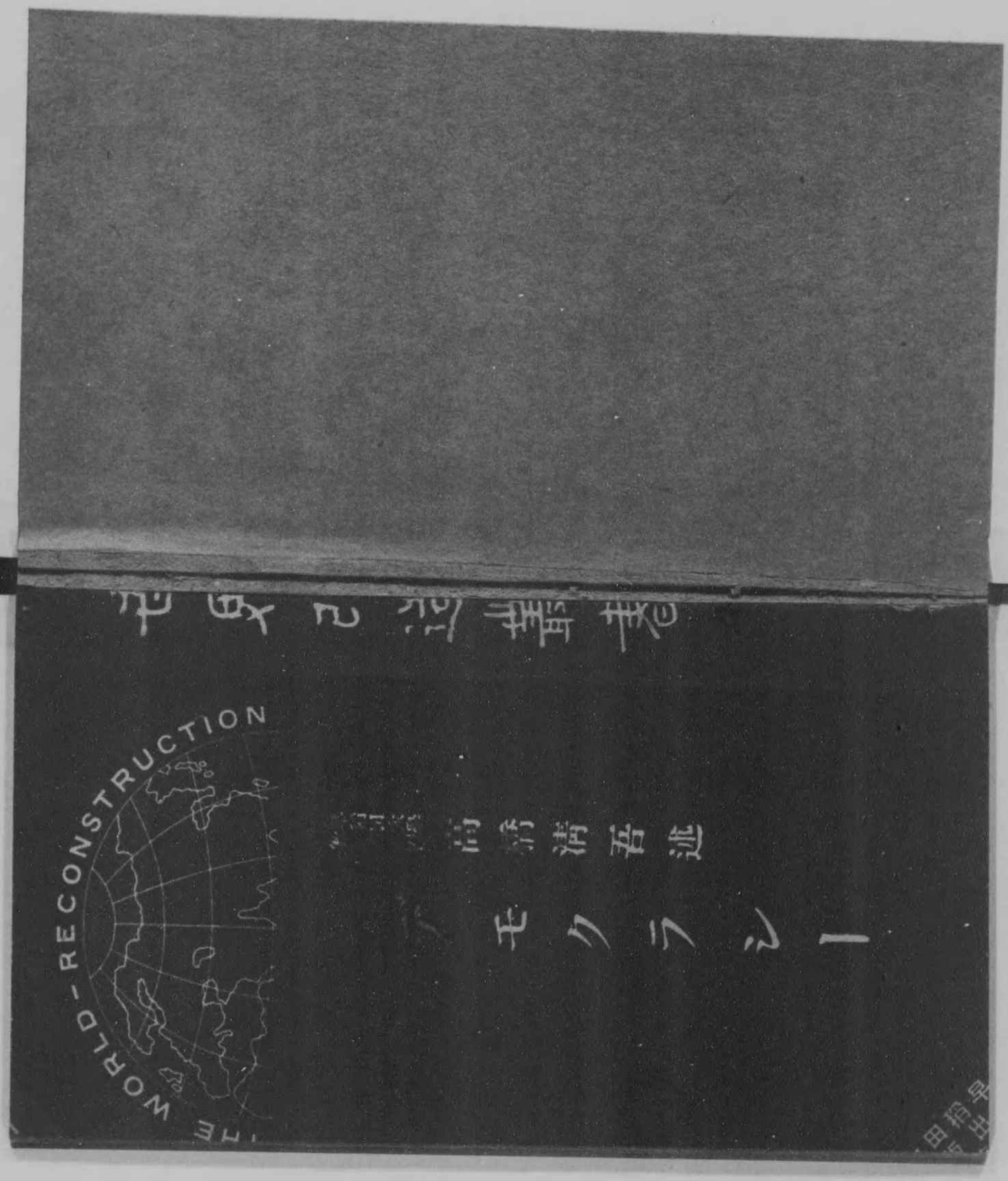
始点

339
16


THE WORLD-RECONSTRUCTION
ヒクラスー
世界改造講座

387-16

はしがき

私はこの小冊子に於いてデモクラシーの概念を明かにしようと努めた。然れども固よりデモクラシーを讀者に推奬しようとするのでもなければ、これを否定するのでもない。只不完全ながら平素研究した一端を簡單なりとも書き竝べて讀者の參考に供しようとするのみである。

殊にデモクラシーは或る一種の主張であるから、之れに共鳴同感せぬ人々を無理に說いたとて功のある筈はない。この點は

8. 11. 28
内交

はしがき

切に讀者の留意を望むのである。

終りに臨み謹んで此の書を著者の信愛する藤田欽哉君の膝下に呈する。

大正八年八月一日

高橋清吾

389-16

デモクラシー

ドクトル、オヴ、フィロソフィ 高橋清吾述

緒言（デモクラシー研究の必要）

「文明社會に於ける諸制度は、主として社會人心即ち民衆心理に依りて其の存立を保障せらるゝものである。而して人類進化の過程は、大體に於いて、保守的に傾く在來制度より新思想生れ、これが更に新なる社會制度を創設する傾向になつて居るから、若し一と度新思想、新運動起りて人心に動搖を來さば、これ直接に現存社會制度の運命にかゝはる事となるの

である。

現狀を維持せんと欲する人々は新思想の宣傳を社會生活に危險なりとして飽くまで之を撲滅せんと努め、また現狀打破を行はんとする人々は現狀を耐へ難き壓制と觀じて新思想の上に新社會を建てんと企てる。かくして兩者は常に確執するのであるが、其の裏面には兩者の意志、確信及び利害の相違が横つて居るか、然らざれば、兩者の誤解が存在するを普通とする。

今日は各國ともに或る程度まで其の傳來を異にし、其の環象を異にするを以て、特殊なる民族性を有し、隨つて一國にのみ關する或る思想、運動乃至、社會問題を有する者も無いではないが、而も猶ほ電氣と蒸氣との成せる國際的交通は、各國文明の相互作用を密接ならしむる結果、多くの問題は國境を超え、民族的特性を凌駕して世界共通、人類共通の問題と化し、ある有樣である。

加之、人類は其の日本人たると支那人たると英米人たるとを問はず、凡べて同一方向に進化するを以て、同一條件の存する所には略ぼ同樣なる事件が起り得るのである。これ今日迄の科學的事實が證明するのであつて各國の出來事が多く世界的性質換言すれば全人類的性質を具有するのは、まだ、惟しむに足らぬ。

人類社會の一部としての我國社會も磁針の終に北を指す如く明治より大正にかけて產業革命を造就し、更に歐洲大戰に會して急速なる商工業の發展を遂ぐるに至つた。然れども之と同時に聯合國の宣言せる「デモクラシ

ーの戰ひ』なる言葉が一般に行はるゝ事となり、戰後經營の諸問題殊に生活費問題と相携へて、社會生活を動搖し始めたのである。最近に於いては、更に、露西亞の過激主義さへもデモクラシーの內容に含められて人心に激動を與へつゝあるので、デモクラシーの問題は一層其の範圍を擴大したと俱に、この問題は世界共通の問題である丈け其れ丈け、根本的に研究を要する事となつた。

ソクラテースは『明知卽ち知ると云ふ事は自己の如何に不明不德なるかを覺る事なり』と云うたが、これは今日の人々にも適用さるゝ名言であつて、殊に社會制度の根本に影響するデモクラシーの了解に關して痛切に其の然るを感ぜらるゝのである。

想ふに、デモクラシーの思想は我國に取りては外來のものに相違ないと予は斷言したい。支那思想を見ても莊子の無政府主義的なるを除いては、支那に歐米に於けるが如きデモクラシーの發現を求むる事は可能なりや否や疑はしいのである。併しながらデモクラシーが外來思想なる故を以て、之を凡べて斥けるのは、歐米文明と相互作用を爲しつゝある日本文明の現狀を否定する事となりはしまいか？

各國文明が相互作用にある以上、思想の相互作用は其の一部分を形づくるものなるのみならず、外來思想其のものが、全人類的の核心を孕んで、其の社會の可能性と合體する場合が今日までの處でも決して其の例に乏しくないのである。果して然らば、デモクラシーの思想は假し一部の人々が

絶對に之を嫌厭するとも、必ず我國人心に培はれて世界思潮の共同圏内に我が社會を運び行くこととなるであらうと考へるが、若し之を避くべからざる人類進化の過程なりとせば、デモクラシーを徒らに排斥するは社會人心を指導する所以にあらず、寧ろ反つてソクラテースの所謂不明不徳に陷ることとなる。其れ故に眞に社會生活の幸福を希ふものは、デモクラシーの中心思想を充分に考究して以て、其の所謂民主主義者なるもの、主張と異なる所を確かめ、其の上に、この思想の健全なる發達を圖るべきである。殊にデモクラシーは各個人の生活其のものより來る當然の主張、卽ち人格發現の一形式なりと謂はれて居る程であるから、其の眞面目なる研究は人生其のもの、研究を兼ぬる事となるのである。但し、偏見や私益のために新しい思想や運動に對して敵意を挾む徒は、こゝに論ずる限りではないと考へる。

一、デモクラシーの語原と古代希臘の實際政治

現代社會生活は、一面に於いて、明らかに、種々の利害を有する各個人の集團的生活であると謂ひ得る。而してこれは、自主的に發達を欲する個人を多く有する社會に於いて殊に然りであつて、かゝる社會に生れ若くは受け入れられる思想は、其の結果として、一般に個人的、階級的、若しくは時代的なるインテレストを其の背景に持つこととなるのである。これ一思想に關する解釋が人に依つて異なる所以であつて、時代思想の一つな

るデモクラシーが其の說く人々の立場如何に從つて其の概念を異にする理由なりと考へられる。

デモクラシーなる言葉は今や世界を通ずる流行語となつた。其の含む所のものは多種多樣に亘るが故に、これが中心思想を攝む事は決して容易な業ではないが、緒言で述べた如く、「デモクラシーは元來歐米文明の所產として、先づ西洋諸社會を動かしたのであるから、彼の地文明の源流なる古代希臘に遡りて其の語原と實際的發現とを搜り、然る後近世に及ばゝ、或はこの思想の核心に觸るゝことなるかも知れぬので、予はデモクラシーの考究を歐洲古代の實際より始めんと欲する。

抑もデモクラシーなる語は希臘語のデモクラテヤより發したと謂はれる。

卽ちデモ（人民）クラテーン（支配する）であつて、「人民政治を意味するのである。

然しながら古代希臘に於ける人民政治とは如何なるものであつたか？

これを確かめなければ古代デモクラシーの意味は分らない。

希臘の歷史家タシディデスが書いたと稱せらるゝもので、かのペリクレス（紀元前四百二十九年頃までの人）の演說なりと謂ふものを見るに、デモクラシー（アゼンスの）を次ぎの如く讃めて居る。

「我が國の政體は他と競爭するを要せず。我國のものは他國の摸倣にあらずして、寧ろ他に範を垂るゝものなり。我が國はデモクラシーと稱せらるるが實に然り。何故ならば、我が國の權力は少數者に依らずして、多數

者の行ふ所なればなり。固より我等は法律を設けて、平等の正義を一般の私事に適用すれどもまた優秀の士の要求をも認むるものなり。市民にして何ものかに勝れたるあらば、必ず公職を以て迎へらる。然れども其の公職たるや、勝れたるもの、特權にあらず、寧ろ技倆に對する報償として與へらるゝなり。其故に貧困たりと雖も、公職より遠ざけらるゝものにあらず、市民は卑賤の他位にありても、彼れの國に貢獻し得るなり。我等が公生活には何等の特權階級なく、また私生涯に於いては他を疑はざるのみならず、他が何事を爲すとも怒らざるなり。……我等は權力と法律とを尊重するを以て、決して惡事を爲さず、殊に我等は被害者を保護する成文及び慣習の諸法律を尊ぶ故に、若し之れ等を犯せるものに對しては輿論を以て罰するなり……』と。

卽ちペリクレスに據ればデモクラシーは公共心に燃ゆる市民の間に技倆の不平等を是認する多數政治であつて、換言すれば、主として政體に關するものである。ペリクレスの時代はアゼンス文化の黃金時代と謂はるゝのであるから如上の意味のデモクラシーが或る程度まで存在したのかも知れぬが、併しながらソクラテースの評せる如くにペリクレスを『善政主義的煽動政治家』として觀る時には、當時のデモクラシーは貴族文化に指揮されたる名目のみの多數政治とするを穩當と考へる。

次ぎにプラトンはデモクラシーを如何に考へたかと謂ふに、彼れは其の著『理想國論 Republic』に於いて『デモクラシーは無教育者等の多數政治

にして、これは有産階級の權力を嫉視せる多數無産階級者が極端なる自由と平等とを求めたる狀態なり』と定義し、また彼れの『政治家論 Politicus or Statesman』にて『デモクラシーは法治國政體としては他の政體より惡なり。されども專制國の政體としては他の政體よりも善良なり。何となればデモクラシーは多數政治なるが故に最善最惡ともに爲すを得ざる狀態にあればなり』と述べて居る。

更にアリストテレスに就いて觀るに、彼れは、かの有名なる『政治學 Politics』の中に『デモクラシーとは自由民にして貧困なるものが社會に多數を占めて權力を握る政治組織を指す』と概念を與へ、デモクラシーの根本原理を說明して『政體としてのデモクラシーなるものは、或る事に就いて平等なる人々は何如なる點に關しても全く平等なりとの觀念より發するものなり。これは人間は（アゼンスの自由民を主として）皆等しく自由なるを以て、其の結果他の凡べての事に關しても平等ならん事を主張するに因る』と論ずるのである。アリストテレスは、かくしてデモクラシーの一形式を具體的に述べて次ぎの如く謂うて居る。

『デモクラシーには種々の政體あり。而して其の第一に算へらるべきは、嚴密に平等觀念の上に立てる政體なり。かゝる意味に於けるデモクラシーにありては、法律は各人の富を平等にするを以て公正なりと思惟すべく、また、富者貧者との間に主從の關係あるを許さゞるべし。何故なれば若し自由と平等なるものが主としてデモクラシーに依りて達せらるゝとせば、

其れは各人が平等に參政するを要するに至ればなり。而して、民衆は常に多數にして民衆の意嚮は凡べてを決定すべし。かゝる政體は確かにデモクラシーの一形式なりと謂はざるべからず』と。

プラトン、アリストテレス倶に彼等が解する如きデモクラシーを好まなかつたと云ふ事は其の著作に徵して明かであるが、ペリクレスを入れてこの三人がデモクラシーを政治組織の一形式と、たのは今日の人々の注意を要する點である。と云ふのは古代希臘殊にアゼンスやスパルタにありては社會卽ち國家であつて、國家生活は社會生活の凡べてを含み國家なくして個人なし、國家は個人を道德的に完成せしむる所以の社會なり。其れ故に、社會卽ち國家は個人の上にありとせられたのであるから、當時は政治生活が此頃提唱せらる、文化的生活の全部を包容して政治にたづさはるものは光榮ある生涯にあるものとなつて居つた。隨つてアリストテレスの如く平等の原理を哲學的に述べて居る人でもデモクラシーを政體の一種なりとして、其れに倫理や經濟や其の他のものを含めたのであつて、卽ち廣義の政治的にデモクラシーを解釋したのである。

これ古代希臘思想の特色であり、而して、この點に於いて近世デモクラシーとの相違を生ずるのである。

デモクラシーの語原たる古代希臘の人民政治（デモクラテヤ）の內容は其の思想方面としては大體以上の如くであるが、更に之を當時の實際政治に就いて考ふるならば、古代希臘殊に其の最もデモクラテックなりと稱せら

れたるアゼンスの歴史は人民政治を完全に行つたとは決して云ひ得ぬのである。例へば、かのペロポンネサス戰爭（紀元前四百三十一年より四百〇四年迄）の初めアゼンス國家（國家と稱するも都市國家なり）に於ける自由民は男女を通じて十三萬五千で奴隷が十萬人程あつたと書かれて居るのを觀ても、又はソロン、クレイスセネス等の憲法改革乃至はペリクレスの實せ善政と其の後の政變とに徵するも、政治、經濟、社會の三要素を含む廣義の政治的デモクラシーが、ペリクレスの言ふ意味に於いても若しくはプラトン、アリストテレス等の述ぶる意味よりしても、大いに實現されたとは思はれぬ狀態である。況んやアゼンスは廣く海外に商業を發展せしめたとは雖、本國の領土は我國の大きな縣位しかないのであつて、今日の所謂、國なるものとは其の地理的環象に於いて、其の人口の點に於いて非常なる相違があつたのであるから、この見地よりしても、近世デモクラシーの背景とは著しく異なる事情が存したのである。

西歐文明の淵叢と尊ばれる丈けあつて、アゼンスの文化は人民政治を容易に行ふには餘りに複雜な社會事情を有つて居つた樣に見える。諸外國との交通は人心を刺激して個人の智的發達を促し、また、外國との絶えざる戰爭は人々の政治的覺醒を來たし、國内に於ける社會的經濟的事情の變遷と俱に新思想の出現を觀るに至り、其の結果彼のソフィストの如きは舊信仰舊習慣に反抗の聲を擧ぐるに及んだのであるが、他方に於いては富と教育とが概して少數者の手にあり、民衆は固より之を喜ばざれども、而も猶

ほ、アリストテレスの定義せるデモクラシーを實現するには、民衆は餘りに貴族的にして且つ感傷的であつた。而して新思想の宣傳を以て任ずるソフィストの中にも私利のために民衆を繰るもの多く、民衆は誠意ある指導者を得る能はず、加之煽動的政治家の民心に阿つて終に專君となるありて、現狀打破の運動は常に政權の爭奪か然らざれば亂を好む無賴の徒に利用せられたのである。

要するにアゼンスに於ける古代デモクラシーの實際的發現は民衆の自覺少なき社會運動と觀らるべく、是れを換言すれば、貴族文化に包容せらる民衆の無秩序なる發作に過ぎぬのであつて、かのクリスセネスの大改革の如きは、之れを民衆的成業と觀るよりも寧ろ貴族的善政主義の結晶と考ふるを穩當とすべき理由が決して薄弱ではあるまいと私は考へる。

かくしてプラトンに嫌惡せられアリストテレスに好まれなかつた古代デモクラテヤはアゼンスの都に完全なる發現を爲すに至らないで希臘の都市國家と倶に永久に逝いたのであるが、併しながらデモクラシーなる言葉は希臘文化の中に永劫の光りを放つて現在の我等を照らして居るのである。

二、近世デモクラシーの通俗的意味

古代デモクラシーに關する事は前章に略述せる通りであるが、今これと近世デモクラシーとを比較する前に、先づ、近世デモクラシーの通俗的意味、卽ち此頃の人々が常識的にデモクラシーを如何に觀て居るかに就いて

考へたい。

デモクラシーなる言葉は一種の流行語なるを以て種々の解釋が行はれ、未だ一定せる概念を得たとは云ひ得ぬ狀態にある。併しながら大略次の如きものが近來行はるゝデモクラシーの内容若しくは解釋となつて居りはしまいか、少くとも其れらの間に近世デモクラシーの眞意義が潛んで居りはしまいかと私は思ふのである。

デモクラシーの通俗的意味を順次に竝べると

(1)デモクラシーを自由と解して新聞雜誌に對する政府當局の干渉をデモクラテックならずと謂ひ、または家父が其の子供に干渉する場合に『俺の父はデモクラテックでない』と不平を云ふのである。

(2)他の意志を尊重するをデモクラシーと解す。此頃の學生は、たとひ自己等の利益になる事でも教師が勝手に行つた場合には往々『あの先生はデモクラテックでない』と云つて怒る。これは各方面に於いても其の例に乏しくないのであつて、例へば家庭で兩親が其の子の爲めに良い嫁を探してやると、子は其れを喜んで受けると極つて居らない。『そんな嫁は要らぬ』と云ふ場合が必ずしも少なくはないのである。斯樣な時には子は常に親が先づ以て子の意志を聽かぬ事に不平であつて、僕の親は子の意志を尊重しない。デモクラテックでない』と云ふのである。

(3)普通選擧權運動をデモクラシーの運動と呼ぶ。男女に對する普通選擧權を與へよと云ふ事は國民一般の政治的平等を主張する運動として、これ

を政治的デモクラシーの運動と稱するのである。

④勞働者團體の主張をデモクラシーの叫びと云ふ。勞働運動は世界共通のものであつて、我國ではこの運動は勞銀の値上げを中心として居る。乍併、勞働者團體の主張は、獨り賃銀問題のみに限つたものではなく、廣義の經濟的機會均等を主張するのであつて、この意味に於いて勞働者の叫びはデモクラシーの聲なりと世間に取られて居る樣である。これは神田の青年會館で勞働者の演說會があると云へば、何人もデモクラシーを想起するに徵するも明かである。

⑤神の前に平等なりと云ふ意味をデモクラシーと稱する。教會の人々は殊にこの種の主張をする。これを宗教的デモクラシーとでも名づくべきであらうか。

⑥『俺だつて人間だ』と云ふ自己主張をデモクラシーと云ふ。これは人格のデモクラシーと稱すべきであつて、車夫や田舍の日傭農夫にもこの精神が流れて居る樣に見受けられる。勞働者が勞力は商品にあらずと云ふはこの意味に於いてである。

⑦法律の前には平等なりと云ふ觀念をデモクラシーと稱する。私は先年米國紐育市に滯在中、市會で勞働者側の代表者が納稅者側の代表者と衞生費の事で論爭せる時に、勞働者側の代表者が『我々は慈善を望まない、平等なる法の保護を要求するのである』と述べたのを聽いた事がある。これは法律上のデモクラシーと觀られて居るのであつて、我國でも法の適用を公

平ならんと努むるは、これに依るのである。

⑧無差別の待遇や交際をデモクラシーと呼ぶ。これも紐育滞留中の出來事であるが紐育の市民が國防準備の大行列を擧行した際、紐育の市會議員の間に、當日の服裝を如何にすべきかの問題が起つた。或る議員はシルクハットに燕尾服を着用すべしと主張したが、多くの議員達が『我々はデモクラシーだ、脊廣服に山高帽で澤山だ』と云ひ出したので多數決で左樣に定まつたと云ふ話を知人の市會議員から聽いた事がある。同じ例は我國の學生と教師との間にもある。或る日學生の一團が教師を招いて小宴を催したとする。元來ならば先生、先生と云つて奉るのが例であるが、懇意な學生達になると左樣な虚禮はやらぬのであつて『デモクラテックにやらうぢやないか』と云つて師弟の差別を撤して會食快談をなすを喜ぶのである。

この無差別は社會的差別の存する所に凡べて適用せらるゝのがデモクラテックに社會を改造する所以なりとせられて居る樣に見受けられる。

⑨學生本位にする教育を教育のデモクラシーと謂ふ。また學校の行政や教師任免に就いて當局者が專斷で決しない樣にする事がデモクラシーだと謂はれて居る。

⑩貧民をデモクラシーと稱する。これは階級的意味を含んで居るためかの社會主義や過激主義の如きものもデモクラシーと稱せらるゝは何れも經濟上の問題が貧富の問題を中心とするが故である。

(11)國際間に於ける各國若しくは民族の平等なる自由發展を國際上のデモクラシーと呼んで居る。今日の支那やチェック、スラボック等の主張を初めとして愛蘭土の自治の如きも其の例であると思ふ。

(12)凡べての自治をデモクラシーと云ふ。政治でも經濟でも其の他個人の事でも自治(セルフ、ガバーンメント)を主張する時は之をデモクラシーの主張と呼ばれて居る。

(13)民衆を中心とする藝術をデモクラシーの藝術と稱する。佛國や米國に旺んな民衆劇、民衆劇場等は此の適例であつて、我が國でも近頃は此の種の運動が藝術界に旺んになり始めた。

(14)皆んな一緒にやる』と云ふ事をデモクラシーと稱する。これは共同的協力的であつて同時に民衆的友愛的なる事を意味する。

(15)現存社會組織を目して軍閥や財閥の利益の爲に存するのであると云ふ人々は軍財閥及び其の他の特權階級に屬さぬものを總稱して『虐げらるゝ人々』と呼び且つ之をデモクラシーと稱するのである。

(16)凡て新しい事で現狀を打破するものに對してデモクラテックの名稱を附する傾向がある。

(17)多數決や選擧投票で人選する事をデモクラシーと呼ぶ。

以上を綜合するに常識的に唱へらるゝデモクラシーなるものは自由のみを極端に主張するものでなしに寧ろ平等の上に立つ個人の自由、階級の自由、民族の自由、人類の自由、換言すれば民衆が目醒めて平等なる自由發

展を希望する事が其の中心思想であるまいかと思はれる。若し通俗的意味のデモクラシーが私の解するが如きものなりとせば、デモクラシーは主として平等觀念の上に立つて居ると云ひ得る事となる。而してデモクラシーは新思想であり、殊に我國に取りては外來思想である丈け其れ丈け現狀打破の思想となるのである。

凡べてのものは、過程である以上、デモクラシーを平等觀念の上に立つて居ると斷定するは、或ひは穩當を失するかも知れない。併しながら、この常識的なる所に案外眞實若しくはリアリテーと稱するものを藏せぬとも限らぬから、これを淺薄なりとして斥ける事は宜しくないのである。況や今日の通俗心理に耳を藉すは妄りに獨斷說を立てるよりも一層眞實に忠なるに於いてをやである。

三、近世デモクラシーの學術的意味

近世デモクラシーの常識的意味は以上の如くであるが然らば其の學術上の意味卽ち專門家達の見解は如何と謂ふに、或る人々はこれを「一つの組織」と觀るのである。

例へば米國コロンビヤ大學のギッディングス教授は「デモクラシーとは平等觀念に基礎を置く政治組織にして、かゝる政體にありては、政府者は常に民衆の承認と協力とを以つて事に任ずるなり」と云ひ、またデューイ博士は「デモクラシーは各個人の品性及び能力を自由にして、之れを社會進步の

爲に利用する社會組織なり』と定義して居る。

デモクラシーを社會組織の一形式とする解釋の中には、かの『民衆のために民衆に依る民衆の政府』と云ふリンコルンの定義や經濟上の機會均等を主張する經濟的デモクラシー乃至は其の上に更に産業上の自治をも欲する産業的デモクラシー等を包含するのであつて、國際的には、今度多少骨抜きにはなつたが、國際聯盟の如きもデモクラシーの一種なりとせらるゝのである。

それから他の人々はデモクラシーを一の哲學若しくは主義と考へる。これは歐羅巴と日本とで、多く唱へらるゝのであるが、殊に何事に付けても、抽象的原理を立てなければ氣が濟まぬと云はれて居る我國と佛蘭西とに其の代表者を見出すのである。

此の種の解釋に據れば

デモクラシーは自由平等友愛主義なりとか、デモクラシーは態度なりとか、公正の精神なりとか、人格主義なりとか、相愛主義なりとか、或ひは社會的平等哲學なりとか、一切平等民衆主義なりとか、其の他これに類する種々の主張をなすのであつて、ロマン、ローランやレオン、デュギュー等の著作を讀むと、其れが明かに顯はれて居る。

想ふに、デモクラシーを社會組織と觀るのも又は一の哲學乃至主義と考ふるも畢竟見方の相違に基づく樣に見えるが、併しながら兩者ともに民衆的であり、且つ平等の觀念に、主として其の基礎を置いて居ると云ふこと

は多くの人々の承認せねばならぬ處と私は考へる。

果して然らば、學術上のデモクラシーと前章に述べたる通俗的デモクラシーとの間に其の意味に於いて根本的相違なしと云はざるを得ぬ事となる。即ち、近世デモクラシーの内容は、學術上から觀ても、又は常識的に云つても、要するに、『自覺せる民衆が出來得る限り一切の平等を求むる點に有する』と云ふ事になる。

この中心思想を各方面に適用して學者達は各種のデモクラシーを論じて居る。

先づ其第一に述ぶべきは政治上のデモクラシーであつて、之は主として平等なる男女の普通選擧權、外部權力の否定、被治者の承諾、階級的代表、特權及び保護制度廢止、陪審制度、常備軍の減少、一切の公表（即ち知らしむべしと云ふ事）一切の最大多數決、輿論の尊重、責任政治、言論出版結社信教の自由、及び可成的民衆の直接政治（米瑞西の人民投票等の如き）等、換言すれば政治上の自治の主張を含んで居る。

第二に來るのは經濟的デモクラシーとでも名づくべきか、これは主として經濟上に於ける一切の機會均等と各人所得の可成的平等とを其の内容に有するのであつて、稅制の問題、物價の問題、公共事業範圍擴張等が其の具體的問題として現はるゝのである。

第三は商業的デモクラシーである。これには四種類ある。其の一は社會政策主義若しくは資本勞働協調主義とでも稱するもので、主に勞銀、勞

働時間、勞働者保健、婦人及び幼年勞働者保護、最低生活限度の保證、養老傷病に對する保險、家屋、休養、勞働者のための文化的教育、技術教育、組合契約（コレクティブ、バーゲン）、同盟罷業權、及び其の他の社會政策を初めとして利潤を資本家と平等に分配する事や事業の經營に勞働者側の代表者を參與せしむる事等、要するに、資本制度を是認する勞資の對立協調主義である。其の二は社會主義で、この中に種々の分派あれども、中心思想は土地及び資本の公有と生産品の公平なる分配とを旨とするものであつて、殊に貧富の懸隔を甚だしからざらしめんが爲に分配を如何にすべきかに就いて色々な主張をして居る。これを換言すれば、社會主義は主として分配のデモクラタイゼーションの主張と觀て差支へないのである。

其の三は何であるかと謂ふに、佛蘭西で有名な、かのサンディカリスム（ファイブリューターブリュー）米國のIWW（ファイブリューターブリュー）とである。これは現存國家を財産國家（プルデーステート）若くは資本國家と認めて、一切の國家組織及び資本を否定して生産機關を悉く勞働階級の手に收め、以て、今日迄虐げられたりと稱する勞働階級乃至は貧民階級の救濟（サルベーション）を行はんとするのである。隨つて、これは生産のデモクラタイゼーションを意味するのであるが、併しながら勞働者のみの利益を主眼とする點は飽くまで喧嘩腰であり、また動もすれば建設的でない嫌ひがある。其の四は英國に旺んとなつたギルド社會主義である。これは生産に從事する人々が、其の職業の種類に隨つて、ギルドを組織し生産に關する事は一切このギルドが社會全體の利益幸福を旨として自治的に經營する仕組であ

つて、各ギルドは、更に聯合して中央ギルド若くはギルド中央議會なるものを置き、專ら生産者側（生産に從事する勞働者側）を代表し、別に政治議會（英國現在の議會）ありて全國消費者側を代表して消費者側の權利を以て、生産管理の任に當るのである。其のためにギルド議會と政治議會より若干の委員を出して産業に關する協調を爲すと云ふ生産者消費者の協力主義であつて、かくして初めて、勞働者等は單に賃銀制度廢止を成就するのみならず、職業を眞に樂しきものとして快くこれに從事することとなり、所謂雇人根性とか、他人の爲に勞働する奴隷なりとか云ふ嫌惡心を持たなくなり、全く自主獨立の人格を養成する條件を得るのであるとして世界の識者の注目を惹きつゝあるのである。英國人は歐州大陸の人々とは聊か異なり漸進的であるのみならず、社會の先達となる智識階級が割合に達觀的なるを以て、前述の社會主義とサンディカリズムとを調和して茲に綜合的に聯盟的なるギルド社會主義を案出したのであらうと考へられる。

各種のデモクラシーの第四は社會的デモクラシーと稱するものである。これは主として現存の社會階級を廢して民衆本位の社會制度卽ち各人に其の平等人格を自由に發現し得る條件を與ふる制度を創造せんとする主張であつて、彼の英米に旺んであつた個人的デモクラシー、卽ち個人の自由發達を極度に是認せる放任主義的デモクラシーに反對する思想である。社會的デモクラシーを主張する人々は個人的デモクラシーなるものをブルヂョー、デモクラシーなりとして攻擊する。而してこの人達は民衆的殊にプロ

レタリヤの地位を引き上ぐると倶に、有産階級乃至は特權階級の地位を餘りに上り過ぎて居るとして之れを引き下げ、以て社會的平均を計る凡べての手段を講ぜんとするものである。故にこのデモクラシーを主として社會平等主義と觀て差支へあるまいと思ふ。

第五は文化的デモクラシーである。文化と云ふ言葉は人に依りて其の解釋を異にするのであるが、玆では文武の文若しくは『高尚な』と云ふ意味で一個人、一社會若くは一團體に於ける學問、藝術、道德、制度及び其の他苟も野蠻殘忍ならざる一切の發現及び他との相互作用を總稱する意味、換言すれば、古臭い言葉であるが、或特定なる社會生活に於ける精華と觀る。文化的デモクラシーは貴族文化に對抗するものであつて、即ち從來貴族若しくは貴族的精神を有する人々に依つて或は指導せられ又は庇護されたる貴族中心の文化に反抗して、民衆多數の生活の内に僞らざる一切生活の眞實を求め、民衆生活其のものを主として文物の價値を定めんとするのである。其れ故に文化的デモクラシーは之れを民衆文化と稱すべきものであつて、其の一例はかの民衆藝術に現はれて居る。

民衆藝術を提唱する人々は『文化の一部としての藝術なるものは決して或る物好き共の贅澤事にあらず。藝術は人生の自然的表現にして生活の眞率なる發露の一面なり』と主張して、今日の藝術は覺醒せる民衆を主人公とする民衆其のもの、爲の藝術でなければならぬと說くのである。其れ故に民衆藝術論者はロマン、ロランと同じく『生活は絕えざる發達にして今

日のもの、決して明日のものにあらず。而して生活の生む藝術は常に新にして、これに一定せる規範を附するを許さざるなり。然るに現狀にのみ固執する支配者階級は人格的生活の所産なる新藝術を危險なりとして壓迫す。これ新藝術を官僚化せんとする彼等の常習心より出づる無識の致す所なり』と論じて民衆劇場と民衆劇とを興して貴族劇乃至ブルジャー劇に洗禮を與へんと骨を折つて居る樣に見受けられる。

更に、例を求むるならば、此頃我國で流行る思想善導云々と云ふ事に關してであるが、文化的デモクラシーを主張する人々は自覺せる民衆を有する社會の文化は上より來るものにあらずして、下より湧き出づるものである。凡ての草木が地に根ざす如く、思想の畠は地下に固有の培養力を有するのであるから、この培養力に適せぬ種を卸したとて生長する筈はない。要するに天下り主義的に思想の善導をしようと云ふのは封建的依らしむべし知らしむべからずの官僚主義であつて、これは民衆の自覺と思想的進化との關係を知らぬ唯物論的信仰者たる支配者階級の妄言であつて、妄ろ滑稽に感ずると云ふのである。

第六は國際的デモクラシーで、これは、米國大統領ウィルソン氏が國際聯盟成立以前に於いて宣言せる民族の獨立保障、各國の經濟的機會均等、海洋の自由、各國軍備の制限、各國內部のデモクラタイゼーション等に加ふるに我國講和委員が巴里會議に提出せる人種的差別撤廢や、英佛白等の勞働團體が主唱せる國際勞働規約及び不完全ながら今回の國際聯盟等を其の

内容とするものであつて、國際生活をする人類が國としても、又は個人として平等なる地位と機會とを以て自由に發展し得る狀態を造らんとする主張である。

最後に來るは近頃我國でも大分問題にされて居るボルセビズムである。この主義は貧民デモクラシーとでも稱すべきか、主として、土地、工場及び其の他の資本を全部國家に沒收するのであつて、而してボルセビキの國家なるものは勞働者の國家である。彼等の主張に據れば有產階級はクーデターでブルヂャー、ステートを建てたのであるから、我等もまたクーデターでプロレタリアの國家を造るのだと云ひ、從來の戰爭は資本家や軍閥等の釀せる戰爭なるを以て勞働者等は都會と田舍とを通じて、皆犧牲にされて居つた。其れ故に、歐洲戰爭を續けるのは眞平御免であると說くのである。ボルセビキは更に、私有財產は盜品なり。凡てのものは國家に屬するのであるが故に、勞働國家に於いては、各人は皆勞働して衣食の資を國家より得べきである。隨つて働かぬものは國民にあらずとするのであつて、ボルセビズムの政治組織は都會農村を通じて勞働者の聯盟組織卽ち地方勞農ソベエトであつて、地方の土地や資本の管理に任じ、これが全國よりモスコーに代表者を出して全國勞働聯盟を作り、其の行政委員會とも稱すべきものが、かのレニン、トロツキー等の過激派政府と我國で稱する所のものである。

レニン等はボルセビズムを辨明して『貧民國家はマルクスの所謂各人の

自由發展は凡べての人々の自由發展を成就する所以なりとする新社會を創造する過程にあるものにして、實に文明史上の新紀元なり』と謂うて居る。而してボルセビズムは單に一國のみに行はるゝ時は外國のブルヂャーのために倒さるゝ恐れあるを以て、各國の勞働者乃至貧民は我等に和して國際的運動の下に資本家階級に對抗せよと論じ旺んに諸外國に主義の宣傳を行ひつゝある有樣である。

露西亞には元來バクニンやヘルゼンの如き無政府主義者を初めとしてブシキン、コゴール、トルストイ、ドストエフスキー、クロポトキン及び其の他の人道主義者『弱い人達の味方』が決して少なくないので、露國國民思想が意識的又は無意識的にこれらの人々の感化する所となつて居た事は露西亞思想研究者の皆一致する處である。

ドストエフスキーの書いたものを讀むと、人間には世間的に偉いのもあらうし、偉くないのもあらうが、人間性の美はしい親しむべき所を持つて居る點は何れも同じであり、別けても、貧乏人や囚人等に案外な信愛の情が漲つて居ると云うて居る。

ボルセビズムはこの種の思想と或は交渉する所あるかも知れぬ。

併しながら固よりボルセビズムは極端なる階級的鬪爭を前提とするものなるを以て、露國の如きと國情を異にせる英國や我國に果して行はれるか否や疑問である。英國の如きは現にギルド社會主義で社會問題を解決せんとして居る事情であるから、其他の諸外國に於いても、何か別な解決策が

無きにしも非ずであると私は思ふのである。

要之、學術上のデモクラシーは社會組織を指稱するものとしても、又は哲學若しくは主義をかく名づくるものとしても、乃至は種々の方面に適用せられて或る特殊の範圍を有つものにせよ、概して云ふならば、均しく自覺せる民衆の積極的活動を示して居る樣に見える。

四、古代デモクラシーと近世デモクラシーとの差違

英國のスウィンバーンは嘗てアゼンスの昔を謠ひて、

"The friutful immortal anointed adored
Dear City of men without Master or lord
Fair fortress and fostress of sons born free,
Who stand in her sight and in thine, O Sun,
Slaves of no man, subjects of none;
A wonder enthroned on the hills and Sea,
A maiden crowned with a fourfold groly
That none from the pride of her head may rend,
Violet and olive-leaf purple and hoary,
Song-wreath and story the fairest of fame,
Flowers that the winter can blast not or bend;
A light upon earth as the sun's own flame,

A name as his name,
Athens, a praise without end"

とアゼンス市民の幸福にして自由なる生活に憧れ、また彼のマコーレーは

"Then none was for a party;
Then all were for the state;
Then the greatman helped the poor;
And the poorman helped the great
Then lands were fairly portioned;
Then spoils were fairly sold;
The Romans were like brothers
In the brave days of old."

と、古代羅馬の如何にデモクラテックなるかを叙して居るが、併しながら兩者とも餘りに古代を美化せる弊に陷づて仕舞つたのではないかと私は考へる。

抑も古代アゼンスや羅馬が其の自由市民に對して參政權を附與せることは、參政權なるもの、內容如何は別として、兎に角史實の證する處である。然れども、この參政權は代議制度の存せざる當時の事とて、自由民が直接政治會議に參加せざる限り何等の意味をもなさぬのであつた。加之、婦人は如何に向上を欲しても家庭以外の事に就いては、常に男子に壓迫せられたるを以て、現今の婦人運動の如きものは夢想だにされなかつたと俱に、

アゼンス及び羅馬には多數の奴隷ありて勞働をなし、自由民等は高尚なる人格を有するものと自稱して、社會に階級的區別を立て、居つたのである。而して、多數の奴隷が自由民等の優越權を喜ばぬ事は固よりであるが、更に自由市民間には貧富の懸隔比較的に甚だしく、之が爲政爭は常に貧富の爭と絡まり、互ひに因果をなして、或ひは專制君主の出現となり、又は暴民政治や煽動的政治家等の專制政治を馴致して政治生活をして益〻感情的ならしめたのであつて、其の結果、世の心ある人々は政治に關與するを厭ひて他の文化的事業に生の滿足を求むるに到り、社會のベスト、ブレーン(best brain)を失ひたるアゼンス及び羅馬の貴族的都市國家は獅子身中の蟲を孕んで、終に外敵の乘ずる所となつて逝つたのである。

其れ故にアゼンスや羅馬の實狀を以て、各人平等なる自由發現を條件付けたる社會狀態と觀るは、史實に遠ざかるものであつて、此の點に於いて古代デモクラシーの實際と近世デモクラシーの通俗的觀念との間に大いなる差が存すると謂はざるを得ない。

更に之れを思想上の比較として考ふるに、古代希臘、羅馬の政治的乃至社會的思想は主として社會萬能の傾向を有し、個人は社會若くは國家(社會と云ふ意味に於ける)のために第二位若くは、第三位に置かれたのである。希臘のプラトンは彼れの理想國に於いて個人の崇尚なる完成を說いたが、彼は續いて、この個人的完成は社會若くは國家を通じてのみ達せらるゝものなりと云うて居るから、結局する處、社會萬能と云ふ事になる。

それから、かのアリストテレスは『人間は天性、政治的動物なり。而してこの性質を有せざるものは神か然らざれば獸類なり』と謂うて居る。この政治的動物と云ふ意味は社會的動物と云ふ意味を含むのであつて、社會第一個人第二の思想はアリストテレスの政治學を貫流する根本思想であると私は考へる。

次ぎに羅馬思想を觀るに、社會思想は大體に於いて希臘思想と異ならざるものであるが、その代表者はシセロである。シセロは『社會(國家)は人間の社會性に發するものにして政府は、卽ち社會を維持せんとする人性に基いて造られたるなり』と謂ひ、更に進んでストア學派の哲學を擴張して『凡てのものは皆神の支配する所にして、人間もまた神に依りて造られ、神性の一部なる合理性を賦與せらる。其れ故に各人は悉く同等にして各人の一致せる聲は神の聲なり』と論ずるのである。

固より古代希臘羅馬にも個人を高調せるもの必ずしもないではない。例へば、かのソフィスト一派なるプロタゴラス派の如き『人間は萬物の尺度なり』と提唱して、個人本位に凡べての社會問題を解決せんとせるを初めとして、ユーリピデスの婦人解放論及び其の他の學派が存するのである。併しながら、これらは一の反動に過ぎぬのであつて、主なる潮流は矢張りプラトン、アリストテレス、ポリビアス及びシセロ等に依りて代表されたる思想であると私は斷定したい。

今、これと近世デモクラシーとを比較せんに、古代デモクラシーは社會

萬能思想の中に生長したのであるが、近世デモクラシーは之れに反して、『各人卽ち民衆の自覺せる平等的主張』とでも云ふべき各個人第一の思潮に棹さして居ると觀て差支へあるまいと思ふのであるが、論の當否に就いては、尙ほ第一章以下を順次に參照せられんことを希望する、殊に第一章を御精讀ありたいのである。

而して、若しこの比較論が大體に於いて許容さるゝとせば、次ぎに來る問題は、然らばかゝる『各人（民衆）の自覺せる平等的主張』は歷史的に何時頃より起つたのであるか、如何なる經路を通つて發展し來つたかと云ふ事である。これに就いては次章に讓る。

五、近世デモクラシーの起原及び其の發達

西曆紀元前後を劃して華と榮えた羅馬文明は幾多の行政的天才や法制家等を出して四隣の統一を行つたのであるが、其の結果の一つとして、得たものは、かの小弱國エルサレムより『嗚、エルサレムよ、エルサレムよ、豫言者を殺し、爾に遣はさるゝ者を石にて擊つものよ、母鷄の雛を翼の下に集むる如く、我爾の赤子を集めんとせしこと幾次ぞや、然れど爾等は好まざりき。視よ、爾等の家は荒地となりて遺されん。われ爾等に告げん、主の名に託りて來るものは福なりと爾等の云はんとき至るまで、今より我れを見ざるべし』と叫べる愛の基督教であつた。

基督教は全人類の愛を説ける宗教である。併しながら其の全人類的なる點よりすれば、ストア思想や羅馬の宇宙國家主義と相通ずるが故に、強大羅馬帝國の宗教としては善かれ悪しかれ大いに利用せらるゝ特質を有して居つた。

果せるかな羅馬の王權は之を國教として帝座を神聖ならしめたと俱に、羅馬覇權の赴く所悉く神の命ならざるはなしと讃美せしむるに到り『上に在りて權を掌てる者に、凡べて人々服ふべし、蓋は、神より出でざる權なく、凡そある所の權は、神の立て給ふ所なればなり。是故に權に悖ふ者は神の定めに逆くものなり。逆くものは、自ら其の審判を受くべし』と神權説を鼓吹する事になつたのである。

而して權力を持つて立てる羅馬帝國の漸く衰るに及んでは、徐ろに傳統的勢力を有し始めたる羅馬教會の勢ひ旺んになり、羅馬の後に興起せるフランクのシャーレマンに戴冠せるのみならず、サキソンのオットー大帝に神聖羅馬帝國皇帝たるの冠を授くるに至つた。かくして、曾ては、羅馬帝國に依りて利用されたる基督教會が、今は逆にフランク帝國を利用し、更に進んでは戰國封建時代の如く分立せる諸王侯の中よりオットー大帝を拔いて之に羅馬法王の勢力を象徴する神聖羅馬帝國皇帝の印綬を帶ばしめたのであつて、神聖羅馬帝國とは名のみにして、實は羅馬教權の精神的物質的實權を語る俗號に外ならなかつたのである。

されば古代羅馬帝國に代はれるものは、フランクにあらず、神聖羅馬帝

國にあらずして、羅馬教會なりと云つて差支へないは勿論、歐洲近世諸國家は、皆羅馬教會萬能の眞最中に呱々の聲を擧げたのであると觀るを穩當なりと私は考へる。

歐羅巴の中世期は卽ち此の羅馬教會全盛時代であるが、當時は一般に農業本位の生活であつたから、民衆は內的には、羅馬法王朝より出づる服從道德に從ひ、學問と云ふものは、貴族（富豪が主として貴族であつた）か僧侶のみの特權に屬するものと考へた。又外的には封建君主（僧侶をも含みて）のピラミッド的專制政治に服して居つたので、民衆の多數は無智貧困の農奴であつた。中世期の暗黑時代とは實にこれを云ふのである。

處が人の力は常に働いて居る。封建諸君主等の侵略的政策は法王朝の俗化と相俟つて、王權の確立を馴致し、これが更に人口の增加と相影響して商業を旺んならしむるに至つた。其の結果は十四世紀の中葉伊太利に旺んとなれる彼の文藝復興運動であつて、パドュアのマーシウリオや英國人ウィリアム、オッカムの如きは政治及び宗教に關する民主的學說を提唱し始め、殊に教會に就いては法王朝の專制を許さず、教會の最高權は僧侶及び一般人民（基督教徒）より成る信者會議若しくは其の代議會議にありと主張したのである。續いて十五世紀には ボヘミヤのフッスや英國のウィクリッフ等の羅馬反對の民主的主張あり、而してこれらは、かの教會代議組織運動（Conciliar movement）と相率ゐて羅馬教權の衰微、個人の覺醒を促進したのであつて、中世期の幕は斯かる急激の變化を以て閉ぢられたのである。

個人の覺醒と羅馬に對する參政（敎權に參與する）運動は、主として經濟生活の變化卽ち商業の發達とこれに伴へる啓蒙思想の產物である事は上述の通りであるが、併しながら、これは少數者に依りて鼓吹されたのであり、別けても各國諸君主の後援に負ふもの大なる事は、當時の產業が猶ほ未だ農業本位であつたのと、羅馬朝の衰微につれて各國の王權が一層旺んになつたのに徵して明かであると考へる。

斯く觀じ來らば近世デモクラシーの『平等なる各人の自由發現』と如上の人智の啓蒙に伴ふ敎會代議組織運動との間に何等かの密接なる關係なきか？　私は近世デモクラシーのヂームがこゝに存するのではあるまいかと思ふのである。

固より敎會代議組織運動は直接的な效果を擧げなかつたのであるから、近世デモクラシーの起原を、其の後に起つた宗敎改革運動に置いても差支へはない。然れども宗敎改革に決定的色彩を與へたものは主として敎會代議組織運動なるを以て、私は代議組織運動をデモクラシーの起原と認め、後に述ぶる宗敎改革運動を其の實際的發現の魁と觀じたいのである。

敎會代議組織運動は羅馬の專制に反抗する事に就いては諸君主と同じ目的を有して居つた。其れ故に法王朝に反對して自己の權勢を擴張せんとする諸君主は陰に陽に之を援けたのである事は上述の如くであるが、其の結果、時勢は更に轉じて十六世紀初頭に於ける宗敎改革の叫びとなつた。

ルーテル等の主張は、凡べての基督敎徒は平等なるのみならず、個人の

自由なる信仰が教會の儀式ばつた信仰個條よりも基督教の本義に近いと云ふ事と羅馬教會を代議組織に改め、且つ世俗に關する權は各國諸君主に屬せしむべきであると云ふのであつたが、教會の壓迫する所となつたので、彼等は、教會がかゝる問題を議する權を有せずと唱へ、終に羅馬を否定して、個人の良心のみが聖書にある神の言葉を解釋し得るものなりと論ずるに至つた。

一面個人の解放個人の權威を高調するこの宗教改革運動は獨逸より出でて各國に傳播し始めた。而して其の餘波とも云ふべきものは『基督教徒の平等及び個人の自由討議』であつたのである。

羅馬法王朝の衰勢を願ふ一部の君主等は、ルーテル等の主張を以て我が意を得たりと喜んだ。然れども當時の君主其のものが、本來神權主義と結びついて居たので、今日は他人の身、明日は我が身である。基督教徒の平等及び個人の自由討議なる二大題目を掲げて立てる諸國の改革者等が、一度教權の現狀打破を叫ぶや、其の止まる所、獨り宗教制度に限らるゝものにあらず。必ずや王權の問題に及ぶものである。宗教改革はかくして政治の改革と其の性質を變へたのである。

ジョン、カルビンの『制度論』(Institutes) は宗教より政治の改革に移れる第一聲である。彼れは『政治は凡べて正理 (Equity) の觀念に隨つて行ふべし。而して人民は神意の代表者としての支配者即ち君主に服從するのであつて、君主は君主たる故に人民を從はしめるものにあらざる故に、若し

君主が神の教に背く行爲を敢てするならば、人民は君主の命を尊重せずとも宜しい。其のために君主の壓制に遭ふとも、我等は使徒のピーターが云へる如く、『人に從ふよりは神に隨はねばならぬ』と云うて居る。もう少しく委しく云ふならば、君主は聖書に現はるゝ神の律法を守るべし。而して聖書の解釋は各個人の良心が之を爲すのであるから、君主は民衆の聲を神の聲として尊重せよと云ふのである。これ個人主義的主張であると俱に、近世デモクラシー最初の組織的發現なりと觀らるゝのである。

カルビンは瑞西のゼネバに於いて自己の理想とする政教一致の政治組織を建設せんと試みた。然れども其れは彼れの思想と稍遠ざかるものであつて、宗教的にはデモクラテックであつたが、政治的には貴族的なものであつた。さればカルビンは實際的には失敗したのであるが、彼れの思想は永遠に生きて、蘇格蘭のヂョン、ノックスの繼承する所となり、次いでチーチ、プカナン及び其の他の人々に傳へられた。

プカナンは千五百七十年に蘇格蘭の若きゼイムス六世（後の英國王ゼイムス一世）の傅育者に任ぜられた。彼れがゼイムス六世に捧げた『蘇格蘭主權論』には、政治社會は各人が正義を發揚せんが爲に存在するもので、この正義は君主よりも法律の力に依りて維持さるゝを善しとする。而して法律は人民の制定にかゝり、君主の存するは契約に因る。其れ故に君主は常に善良の模範でなければならぬと同時に、其の權力を行ふに當りては正義と法律とに準據すべきであると論じて居る。

更に宗教方面は如何と謂ふに蘇國は英女王エリザベスの蘇國瓦解政策と王室の柱石弱かりしとに主因して、チョン、ノックスの長老主義（プレスビテリアニズム）が全土に擴がつたので、蘇國はかのゼネバと倶に歐洲に於ける宗教改革者等の庇護所となつた。

千六百三年ゼイムス六世は英國王をも兼ねてゼイムス一世と稱するに至つたが、卽位の翌年四名の改革派牧師をハンプトン法廷に召喚して、長老主義の背理なることを力說し、以て英國を英國々教會の永久なる安定所になさんと欲した。然れども改革派の牧師等は飽く迄基督教の眞義は長老主義にありと主張したので、彼は大いに怒つて "No Bishop, No King" と叫び、君主の命に從はぬものは凡て流罪若くは死刑に處するから左樣心得よと云ひ渡したのである。

"No Bishop, No King" は何を意味するかと謂へば、英國の宗教改革運動が政治改革の聲と變つた事と、ゼイムス一世の帝王神權說を固執して最後まで戰ふ決心とを語るのであつて、英國の改革者等は或は蘇國に逃れ又は海外に移住し始めた。而して其中で最も著名なるは北亞米利加のニューイングランドを建設せるピューリタンの一團である。

千六百二十五年にはチャールス一世の卽位となつた。この時は旣に英國の海外發展旺盛なる際として、國內には新興の商業階級あり。また海外には自由の活力に燃ゆる英國男兒の冒險的計畫が海軍力に保障せられて着々として成功しつゝあつた。其れ故に英國の經濟生活は大いなる變動を生じ、

新興商業階級の『自由』を求むる聲が英國議會の心を動かし初めたのであつて、チャールス一世は卽位の當初よりこれら政治經濟宗教等の難問題を提ぐる議會と爭はねばならぬ他位にあつたのである。

事端は終に商業階級に課せる租稅及び其の他の紛爭より內亂と變り、かの淸教徒革命を現出した。ミルトン、ハリントン、リルバーン等の自由共和主義は、この間に宣傳せられて『自由』を欲する英人の血を沸かし、又インデペンデントの主張せる代議政體、男子普通參政權等はデモクラシーの基本とせられて、クロムウェルの共和政治を發展せしめ、大體に於いて議會の權力と新興富豪等との要求を是認せしめたのである。英國は再び千六百八十八年より九年にかけてホイグ革命を成し遂げたのであるが、これは英國の權力を絕對的に議會に移したと云ふ事と、上部中流階級殊に商業階級の參政するに至れる事、及びヂョン、ロック等の提唱せる自然法、自然人權、社會契約、權力分立、革命正當論等を政治の原則として許容せる事、以外に何事をも意味しなかつた樣に見える。

卽ち、英國は宗教改革より政治革命に入り、如上の淸教徒、ホイグの二革命を經て、十七世紀の末、主として中產階級を中心とする國家に發展したのであると考へられる。而して、其の進化的背景とも稱すべきは英國海軍に依りて護衛せられたる海外商業の發達と、これに伴ふ『個人自由活動の要求』なる事は注意を要する點である。

其の後英國は一方に於いて政黨內閣政治を確立し、他方にありては、かの

佛國大革命に對抗しつゝ、千八百三十二年まで政治的には現狀維持で進んで來たが、ゼイムス、ワットの導ける器械の發明は十八世紀末より產業革命を成就し、英國を工業國化せるに、加ふるに、佛國革命思想は自由放任政策に依りて苦しめられたる都會民衆に傳播し、かの人道主義者カーライル等の有產階級政治反抗の聲と相携へて、三十二年に於ける都會小賣商人等の參政權獲得となり、六十七年には更に都會勞働者の上部に選擧權を擴張し、八十四年には之を農業勞働者に適用して第二十世紀に移つた。二十世紀に於ける英國は、先づ千九百一年の政變で下院の權力を增大し、千九百十八年の春にはまた三十歳以上の婦人六百萬人及び未だ參政權を有せざる男子に選擧權を與へたのであるから、英國は婦人に年齡の制限あるを除きては、事實上の普通參政權國となつたのである。

ヂョン、カルビンの制度論は以上の如くにして英國に其の繼續的發現をなしたのであるが、選擧權の進化で明かなる如く英國は元來階級的に權力を握れる國である。

卽ち千六十六年ノルマンデーのウィリアム一世がウェストミンスターで戴冠せる以來淸敎徒革命までは、主として君主と僧侶及び貴族との國家であり、淸敎徒の革命より千八百三十二年迄は中流階級を含む貴族政治で、千八百三十二年より歐洲大戰迄は勞働者の上部を含むブルヂョー政治、而して歐洲大戰後は勞働者と婦人を含む民衆政治なりと大體に區別し得らるるのであつて、第一期は主として農業的、第二は商業的、第三は商工的、

第四は工業的經濟生活を背景として居ると考へられるのである。

されば英國のデモクラシーと稱しても、最近までは決して、かの十六世紀のトーマス、モーアがユートピアで主張するが如きもの若くは最近のデモクラシーではなく、概して個人主義的であり、自由の觀念に立つたものであると御承知を願ひたい。これ歐洲大陸の人々が英國のデモクラシーを目して個人主義的デモクラシー若くはブルヂョー、デモクラシーと呼ぶ所以である。其の理由は、個人的デモクラシーは海外發展の資本主義的國家か、然らざれば小農本位の國家生活のみに適用さるべきものであつて、今日の如く平等なる各人の自由發展を主張する所に於いては、寧ろ之れをレアクショナリー(反動派)として斥けねばならぬと云ふに存する。

併しながら固より個人主義的デモクラシーがあつて初めて民衆的且社會的なるデモクラシーが發展し來つたのであるから、歴史的過程を知るには英國のデモクラシーを知る事が最も肝要であると私は思ふ。即ち英國のウィリアム一世が建てた政治的經濟的社會的のピラミッドが人の力に依りて上層より崩れて、今日の如き民衆(土臺)に歸したと云ふ事は、最も興味深き史蹟であると倶に、英國の民衆的デモクラシーが今後如何に發展するかは人類進化の上から大いに注意すべき點である。

次ぎに米國のデモクラシーに就いて述べんに、

米國の北部は嚮に述べし如く英國清教徒の一團がゼイムス一世の千六百二十年に移住せるに初まるのであつて、地理的狀態は主として小農若くは

漁業に適して居つたから、北部即ちニューイングランドの人々は獨立農業的であり且つ海濱地方は商業が旺んであつた。加之、北部の人々は清教徒なるを以て、こゝにデモクラシーの生ずるは自然の順序である。之に反して米國南部は大農的であり、且つ英國貴族の移民を率ゐて來れるに始まるのであるから概して貴族的であつた。獨立戰爭前の北アメリカは、かくの如き二樣の生活を包容して居つたのであるが、一度ボストンの商人等が英國の經濟的專制に反抗してレキシントン、コンコードの戰を開始せる以來、南北一團となりて、新世界の爲に奮戰する事となつたのである。

かのトーマス、ジェファソンは獨立宣言を草して、

『各人は其の生まるゝや、自由にして且つ平等なり。其れ故に各人は天賦の人權を享有するものなるが、就中重要なるものは、生命、自由及び幸福の追求なり。而して政府は、これらを保護するが爲に設けられたるものにして、政府の權力は被治者の承諾を得ざれば正當なる能はず』と個人自由主義、人性信賴主義を主張した。然れども眞に主義に忠實なりしはジェファソン一派の少數者であつて、多數は自己の利益の爲にこれに雷同したのであつた。

ジェファソン主義を大體繼承せるはヂャクソン大統領である。彼は西部の開拓地より起れる豪放の人で、粗朴の平民政治を要求し、且つ『官職は勝者に屬する』と云ふ純政黨政治を實行した。而してこのヂャクソン主義は一面佛國大革命の思想と相通ぜるを以て米國各州に擴り男子普通選擧權の施行を

促進したのである。

かゝる間にも英國に起れる産業革命の波は米國に及んで、米國は農業國より商工業國へと進み、其の道程に於いて彼の南北經濟的利害の衝突を主因とする南北戰爭に逢着したが、北部商工業階級の勝利となつてよりは、商工業階級の活動一層大規模となり人口の都市集中を馴致して社會問題の解決を困難ならしむるに至り、この勢は今日に及んで居るのである。其れ故に千八百九十六年の大統領選擧には、かのブライアン氏ネブラスカの僻地より出でて『我は勞働者の友なり、貧民の味方なり』と叫び、また千九百十二年にはウィルソン氏出で、資本家を攻擊し、ジェファソン主義の近世的適用を主張するに至つたのであつて、戰爭後の米國は英國と同じく民衆的デモクラシーの思潮に充され、今や婦人參政權も全國を通じて實現されんとしつゝある狀勢である。

かくして英米のデモクラシーは、約言すれば個人主義的であり、最近に至つて初めて民衆的若くは社會的になり始め、社會的經濟的の難問題を含むに至つたと觀て差支へないのである。

然らば大陸諸國は如何と云ふに、

歐洲大陸にありては佛國大革命が近世デモクラシー最初の具體的發現である。

抑も、歐洲大陸は獨逸の自由都市を除く外、概して封建的階級制度を有したのであつた。殊に佛蘭西に於いては革命まで王室、貴族、僧侶、中產

階級(ブルヂャー)、職工及び農民等の定着的階級あり、各人は己が屬する階級に生れて、其の階級の人として死ぬものと運命的に心得て居つたのであるが、商工業の漸く旺んなるに及んで、中産階級の數と富とを增加し來り、其れに加へて知識の普及を齎す事となつたので、中産階級殊に商人、辯護士、醫師、教師、操觚者等は上流社會を嫉視し、上流階級の存在を不合理の甚だしきものと考へ始めたのである。モンテスキュー、ルソー、ボルテー等は卽ちこれが先鋒であつて、彼等は現在階級社會を不條理にして利己的なりとして攻擊した。就中ルソーは『財産の不平等は一切の社會的不平等の根源にして、最初或る土地を圍つて、これは我が財産なりと稱し、衆人をかく信ぜしめたるものが不平等社會卽ち現存社會最初の建設者なり』と現存社會制度を否定し、更に彼れの民約論に於いて『人間は其の生まるゝや自由なれども、同時に社會の鐵鎖に繫がれ居るなり。(其の意味は人間は自由人として生れるが、同時に政治社會に生まれるを以て自由と權力とは矛盾する如く見えると云ふのである。)何故に然るや、予は其の歴史的解決を認むる能はず。予の合理的解決を以てすれば、人間は凡べて自由にして且つ平等なり。されど權力に服するは相互の契約に基づくなり。卽ち民約に依る以外、自由民を束縛する權力は合理的に存在する能はず』と國權在民説を提唱したのであるが、彼れの主張は鬱勃せる當時の革命的感情を刺激し、其の止まる所を知らぬ勢ひを呈した。

佛蘭西人は一般に主義を愛する國民である。今、ルソー等の宣傳あるや、

彼等の多くは之れを以て自己等の要求を正當ならしむる道德主義と解釋するに至り、ブルヂャー（知識階級を含む）を中心として、かの千八百八十九年に於ける國民議會の人權宣言を發布し、次いで一切の階級を全廢する大革命を惹起したのである。

人權宣言の中樞と稱すべきは、『各人は生まるゝや自由にして永久に自由と平等權利とを享有するものなり。而して人權の主なるものは、自由、財產、安寧及び壓制拒止の諸權利にして、法律は凡べて普通意志の發現なるを以て、各人は自身若くは代表者を以て、其の制定に參加するものなり……』と云ふ社會平等說であるが、（宣言の後章に私有財產及び國家財政に關する、有產者竝びに納稅者に對する保障條件が書いてある。）これは何を意味するかと謂ふに、佛國大革命はブルヂャー革命に依つて始まつたと云ふ事實を證して居るのである。卽ち佛蘭西のブルヂャーは最初上流社會を嫉視して居つた時に、之を倒すには下層階級（都會勞働者及び農民）の力を必要としたので、下層階級に社會的平等を約して相俱に上流社會に當つたのであるが、人權宣言の發布まで事件を進めたので、下層社會には名目的の平等權利を與へ、自己等は實權を收めてブルヂャー國家を建てんとした。これが人權宣言にブルヂャーを保護する條規の存する所以である。

佛蘭西のブルヂャーは、更に進んで千七百九十一年の憲法に於いて參政權や任官權等を納稅者や有產者のみに限つた。かくして下層社會の信賴を賣つたのであるから、ナポレオンが佛國大革命を嘲つて「ブルヂャーの虛榮

心から起つた」と云つたのも、必ずしも理由のない事ではあるまいと考へる。

「僞られたる下層社會は遂にダントン、マラー、ミラボー等の同情を集めて、豫ての約束を實行せよと迫つた。而して其の結果はモップ、ルールを現出して歐洲諸君主國政府の干渉を招き、形勢は急變してナポレオンの帝政を觀るに至つたのである。佛蘭西は、其の後數次の內憂外患に遭うた。然れども千八百七十一年の第三共和國の成立に及んで男子普通選擧權を布き、社會階級を廢して堅實なる國民的生活を初めた。而してブルヂャーの經濟的勢力は政治的に活動して今猶ほ佛蘭西を支配して居るが、今次の大戰に依りて之が如何なる形勢を馴致するかは、今後に俟たねばならぬと俱に、「佛國大革命の餘波たる自由平等友愛の三原則は一百有餘年以外世界人心を支配し來り、殊に平等の原則は婦人運動及び勞働問題に對して道德的基礎を與ふる事となつて近世デモクラシーを特色づけつゝあるのである」

佛蘭西人はバークの云へる如く極めて感情的である。殊に封建制度が最後迄嚴在したので、猛烈に彼等の反抗心を刺激した爲に、英國人が進む程度よりも極端に行つて、而も實際の結果は英國人程進まぬのである。これは英國人の個人的にして佛蘭西人の社會的なる特性に因るのではなからうか？

何れにせよ佛蘭西のデモクラシーは社會的平等を大いに高調する思想

であつて、實際よりは主義を重んずる樣に見える。併しながら固より主義其のものと國民性とは全然區別すべきものなるを以て、佛國大革命思想が全歐を震撼して、今日のデモクラシーの中心思想となつて居る事は注意を要する事柄である。

次に獨墺諸國に就いて觀るに、佛國大革命以前は佛國の如き封建制度の下にあつたが、佛國革命思想及びナポレオンの侵略に遭うて、國家的にはナショナリズムの反動的發現となり、また國民的にはデモクラシーの要求を觀るに至り、かの千八百四十八年には諸國を通じて革命的運動が成立したのである。爾來獨墺諸國は幾分か階級制度を改め憲法を制定して人心を安定ならしむるに努めた。然れども兩國とも殊に獨逸帝國のプロシヤの如きは歐洲戰爭當初迄種々なる階級制度及び階級政治を有したのであつて、ビスマルクが獨逸統一の時に附與せる獨逸帝國男子普通選擧權の如きはマキアベリズムの顯現なりと云はざるを得ない狀態にあつたのである。

今度の戰爭で獨墺諸國の內部が如何になりつゝあるかは不正確ながら新聞紙の報道に依りて知るの外はないが、獨墺にもマルクスあり、ラサールあり、グンプロウィッチあり、リーブクネヒト、ローサ、ルクセンブルグありて急進主義思想を宣傳し、其の世界的影響は決して佛國大革命思想に讓らざるものあるを以て、社會制度としてのデモクラシーが上述の如く遲れても、思想的發現は英米の其れに勝るとも劣らぬと觀察さるゝのである。

それから露西亞であるが、現狀に關する事は只今の所、正確なる材料が

ないので述べ兼ねるが、有名なる制度史の研究者フィノグラドッフ氏の說に據ると露西亞の民衆は一般に人道的で、殊に貧民や虐げられたるものに對する本能的同情は世界の奇蹟に近いと云うて居る。トルストイは平和的無抵抗主義を說いた。これは權力に盲從せよと云うのではなく負けて勝てと云ふ愛の宣言である。果してこの主義が露西亞思想の中心思想なるや否や明言し難いが、かのクロポトキン氏が露西亞の識者は政治に生きられないから文藝に生きようとすると書いて居るのを參照しても、或は當つて居るかも知れぬのである。

露西亞の歷史は佛國大革命の影響を受けてデモクラティックに向つて來たが、制度の上に現れたのはクリミヤ戰敗を劃する農奴の解放と立憲制度樹立は闘する勅書及び日露戰爭の敗北より來れる議會の成立と而して今度の革命である。極端なる專制主義の國、中流階級（知識階級をも含みて）が利己的なる社會に於いては、常に英國の如き人類社會の進化を觀る事が出來ないが、併しながら人の力は常に同じ方向に働きつゝある事は何處の社會も同一であると私は考へる。

要之、近世デモクラシーの發達は經濟生活を背景とするものであつて、或る經濟生活の下に或る思想生れ、これが先づ第一に政治的改革を行ひ、次いで經濟的社會的なる改革に進み、更に新なる思想が生るゝといふ順序を以て進み來つたのである。而して思想的には英米の個人主義的デモクラシーあり、歐洲大陸の社會平等的デモクラシーあり、其の何れが思想上

先に來るものなるかは、之を絶對的に云ふべからざるものであるが、歴史的には少くとも個人的デモクラシーが先きであつて、大陸主義は其の後に來り、今猶ほ旺んに擴まりつゝあるものと觀るを穩當とする。更にデモクラシーの發達を政治的に結論すれば、私はデモクラシーは外的權力の否定であると云はんと欲する。而して其の當否は之れを上述の實例に求めたいのである。

六、近世デモクラシーの定義及び其の主張

A　デモクラシーの定義

以上を以てデモクラシーの概略的考察を終へたので、今や自己の定義を下す順序になつたと考へるが、私は近世デモクラシー、殊に佛國大革命愚想に發する最近時のデモクラシーを次の如く觀たい。

㈠ 人生哲學としての最近時デモクラシー

人生哲學、即ち個人的にして主觀的なる見地より定義すれば『最近時デモクラシーは人格能力（パーソナリティー）自由發現の過程にある一現象として現はれたる平等主義』なり。

㈡ 社會哲學としての最近時デモクラシー

社會哲學即ち社會的にして客觀的なる方面より觀れば『最近時デモクラシーは主として民衆平等主義』なり。

㈢ 社會組織の一形式としての最近時デモクラシー

政治經濟及び社會的なる一切の制度を包容する社會組織としての『最近時デモクラシーは各人に平等なる地位と機會とを與へて其自由發展を保障し、以て其れより來る各人特異の能力を全社會の爲に効用する社會組織』なり。

(四)更に之れを政治的に定義すれば、

『政治的デモクラシーは外的權力の否定(Negation of Power)換言すれば一切の權力を自己等(民衆)の手に收めんとする自治的精神の發現なり』となる。

最近時のデモクラシーは、かくの如く、其の異なる主體より觀察すれば如上の諸定義を有する。併しながら、もう一歩進んでこれ等種々なる定義を一と纏めにせば如何であるか、即ちこれら諸定義の中樞思想とも稱すべきもの、若しくは各定義の綜合的交叉點を見出して、一層根本的なる定義を下したならば如何であるか、こゝが私の更に新なる定義を加へんと欲する要點である。

想ふに、人間は一面社會生活を必要とするものであつて、人間が進歩すればする程社會より離るゝ事は出來なくなる。而して社會生活は各個人間の關係を意味し殊に各人格間の關係を示すのである。即ち各人格は社會生活に於いて其の實體的なる發現をなすのであるが、人格の發現なるものを歴史的、進化的に觀るに、初めは無意識的、自然的、他動的であつた。然るに時の進行に伴ふ經濟的、社會的變遷は人智の進歩を促進して個

人を意識的、人爲的、自覺的ならしめ、其の結果、各人格の向上、換言すれば社會の進歩を齎したのである。世に教育が社會化の第一次的條件と稱せらるゝは蓋しこの事實に基づくものであると私は考へる。

各個人の人格的進化を意味する社會進化は、常に過程を經て進むやうに見える。而して、この過程は、時代に現はれては多く運動となるを以て、今若しデモクラシーを人類進化の避くべからざる一過程なりとせば、これを時代的に解して運動と觀るは學術上必ずしも不適切ならずと信ずる。其れ故に私はデモクラシーを次の如く定義したい。即ち

『最近時に於けるデモクラシーは、自覺せる民衆が主として平等の理想に立つて、現狀を打破し、以て各自に對する自由なる新社會を創造せんとする運動なり』

この定義に據れば主として『平等』を最近デモクラシーの基礎とするのであるが、これは歴史的事實が證明するのみならず、また論理上最近時に於けるデモクラシーの特質を説明するものとして許容さるべきものであるまいかと思はれるが、猶念のため、以下之が理由を述ぶるつもりである。

私は、『自由』は個人的にして『平等』は社會的民衆的なりと考へる。人生哲學の上から、人生の目的は個人の自由發現にありと觀るは私も同感であり、且つ其れは進化的事實であるに相違ないが、而も猶ほ、個人が一面社會生活を必要とする以上、自己の自由發現なるものが、同じ他人の自由發現に依りて條件づけらるゝと云ふ事は止むを得まいと思ふ。

何故ならば他を考量せざる自己の自由發現は他を自己の手段とするに至るものであつて、これは人格間の關係を意味する社會生活の到底忍ぶ能はざる處なるが故である。

されば自己の自由發現（人格能力の自由發現を云ふ）が社會的に現るゝには、各人の自由發現と云ふ事にならねばならぬ。而して各人の自由發現は平等なる各個人の自由發現となりて初めて人格上の意義を有するものなるを以て、『各人の』と云ふ意味は社會的なるのみならず、更に平等觀念を必然的に含むべきである。

之を進化的事實に徵するに、自覺する多數の個人を有する社會程平等の地位と機會とを得ようとする思想や運動が激しいのであつて、かゝる社會に於いては個人的自由なるものは專制的權力に對抗する場合以外は、概して第二次的のものと見做され、各個人の平等が第一次的要件と考へられて居る有樣である。

固より人生の目的が個人人格能力の自由發現に存する限り『自由』の消え失せる事は考へ得られぬのであり、反つて社會進歩につれて個人自由が擴張されつゝある傾向にあるは進化的事實の立證する所であるが、乍併、個人の自由と云うても各個人の自由、卽ち平等なる各個人の自由と云ふ數量的のもの、若くは民衆的のものになつて居ると云ふ事は妄りに否定出來まいと思ふ。

更に政治史は、これに就いて何を語つて居るかを觀るに、近世社會には、

初めコンクヰスト（征服）が來たので『權力對個人の自由』なる叫びが、主として活動的なる商業階級より起つたのであつた。處が少數者の個人的自由は、政治的、社會的、乃至經濟的に甚だしき不平等を產むに至つた爲に、民衆は一齊に『社會的平等』を要求し、以て各個人の自由を主張することになつたのであつて、歷史的に謂へば、個人的自由は少數者の自覺して自由を欲せるもの、また社會的平等は自覺せる民衆が各個人の自由を求むるものと觀らるべく、兩者何れも人格的自由發現の過程なる點に於いては共通であり、只前者は飽く迄個人的なるに反して、後者は『各人の』と云ふ社會的民衆的なる所に相違が存するのみである。

近世社會は自覺せる民衆を有する社會である。其れ故に各個人は凡べて自由ならんとするのであるが、『各個人の自由』なるを以て、平等なる各個人の自由發現となるは理の當然であつて、これが最近時デモクラシーが『平等なる各人』に重きを置き『自由なる個人』を第二次的要素とする所以であらうと私は考へる。

或る社會に於いては自由と平等とが雜然として主張されて居る樣に見受ける。併しながら、これは其の社會の事情に基づくものであつて、一般の進化は上述の如くに平等を主とし、而して個人的自由は平等と兩立する範圍、換言すれば『平等なる吾人の自由』のみに限られつゝある傾向である。

次に私の下せる定義『最近時に於けるデモクラシーは自覺せる民衆が主として、平等の理想に立つて現狀を打破し、以て各自に對する自由なる新

社會を創造せんとする運動なり」に就いて簡單に述べんに、

(イ)デモクラシーは主として平等觀念に立つ理想主義なり。

最近時のデモクラシーは社會的平等を以て、其の哲學的基礎とするものであつて、將來に大いなる希望をかくる理想主義である。

(ロ)デモクラシーは自覺せる民衆の運動なり。

歴史的に謂へば、民衆の自覺なき所にデモクラシーの運動は起らない。歐米に於いては産業革命に伴ふ生活の向上が民衆の自覺を促したのであるから、民衆は或る經濟的階級をなして階級的に運動を行つて居る。

(ハ)デモクラシーは現狀打破の運動なり。

在來の諸制度は概して社會的平等に基本を置いて居らぬ。其處で自覺せる民衆は在來の制度を既に無用に歸したもの、又は不合理なものとして之を打破せんと努むるのであつて、其の根本的方面に於いては、在來制度の基礎たる思想を打破しようとするのである。これデモクラシーの一面宣傳的なる所以である。

(二)デモクラシーは新社會組織に對するす建設的計畫なり。

最近時のデモクラシーは單に破壞的若くは想像的なものばかりではなく他に實際的建設的なるプログラムを有する。隨て從來の如くデモクラシーを空想と見做すは最近デモクラシーの本質を知らぬ者の罪となるのである。

B、デモクラシーの主張

(一)理論的主張

「米國の詩人ワルト・ホイットマンは此デモクラシーを謳つて、

"I celebrate myself, and sing myself,

And what I assume you shall assume,

For every atom belonging to me as good belongs to you."」

* * * * * * * * * *

I speak the pass-word primeval, I give the sign of democracy,

I will accept nothing which all cannot have their counterpart of on the same terms."

と各個人の地位と機會との平等を主張して居るが、私はこの中に最近時デモクラシーの核心があると考へる。併しながら尙ほこれを精細に述べるならば、デモクラシーは大體次の主張を含む樣に見える。

㈠各個人は、皆顏や技倆を異にすれども、これは畢竟程度の差に過ぎぬものであつて、根本的には人間と云ふ感情や形體を有する同一型に屬するのである。「雪の日やあれも人の子燃拾ひ」は蓋し此主張を感情に表はせるものと觀られる。

㈡各個人は各〻異なる特性を有する。是卽ち各個人の自由なる創造性であつて、社會の進步幸福の源に缺くべからざるものであるから、同價値を有するものである。例へば時計の諸機械が大小となく有用なる如く、各人は田舍の農夫でも都會の大臣でも俱に社會生活に有用なる點に於いては

同價値と謂はねばならぬ。

(ハ)人間は其の生る、や平等に近い。然るを不平等なる四圍の環象が經濟的、教育的に各人の進歩を妨げて、社會的不平等を生ぜしめたのである。其れ故に今日の如き不平等(個人的にも社會的にも)の罪は境遇に存するのであつて、境遇さへも改まつて各人平等の地位と機會とを得る事となれば、個人的社會的不平等は衆目を惹かぬ態度に減少する事となる。

(ニ)各人の生活は其れ自身が目的なるを以て、心理的に同價値である。例へば按摩の生涯でも富豪の生活でも、要するに、各自其れ自身が目的なるを以て、貧富の差はあれ、同價値と謂ひ得る。

(ホ)人性は善である。故に信頼すべし。殊に人間は一面、合理的天性や人情を有するものであるから、信頼すべきである。信頼は責任を產む。

(ヘ)生物は弱肉强食よりも相互協力に依りて一層進化發達する。殊に人類に就いて然りであること はクロポトキンやギッデングス等の立證する處である。

(ト)歷史の二大潮流とも稱すべきはコングストとヒューマニティーである。而してヒューマニティーは常に無言の勝利者であつて、これは下より來る民衆の聲である。

(チ)從來は政治、經濟、社會、教育、文藝ともに、皆少數者の利害に應じて壓制的に支配されたのであるが、今度は社會的地位と機會との平等を要求する民衆が代つて平等的に支配するのである。

(リ)經濟上の平等を實現して人格を物質より解放し、以て各人の自由なる生活を成就する。

以上は最近デモクラシーの理論的主張であるが、玆に注意を要するは、デモクラシーの理論が、從來の如き宗教的道德的なるに加へて、更に科學的、心理的なる主張を含んで居る事である。これはデモクラシーが實際的になつた事を裏書すると俱に、現代生活の合理的になりつゝある傾向を語るものと謂はねばならぬ。

(二)デモクラシーの建設的計畫

最近デモクラシーは決して單なる空想的若くは破壞的運動にあらざる事は上述の通りであるが、然らば、其の建設的計畫は如何と謂ふに、各社會に依りて異同あれども、大略次ぎの如きものが共通點であらうと思ふ。

(イ)政治上の自治(民衆政治)

男女平等なる參政權を有して、可成的に直接政治を行はんとするものであつて、これを可能ならしめんが爲に、一切の公表、言論出版結社信教の自由、憲法改正會議、少數代表、團體代表、一院政治、人民投票制(イニシエティヴ、レフェレンダム、レコール)、地方自治の委員政治、軍隊の民衆化、及び文官任用の民衆化等を行ひ、之と同時に各人の連帶責任を確立せんとするのである。かくして民衆政治に於いては官僚軍閥なるものが民衆的管理に置かるゝを以て自然に其の存在を失ふ事となる。

(ロ)經濟上の計畫(經濟上の機會均等か、然らざれば經濟上の絕對的平

等乃至消費組合運動の如き經濟的自治）

これは國民的生活の發達と個人生活の安定とを旨とする計畫であつて、主として各人所得の平等、生活資料の公定（食料品や住宅等衣食住に關するもの）、消費組合の自治並びに責任政治及び行政の管理する公共事業の可成的增加等を具體的に實現せんとするのである。

㈧ 産業上の自治と生産能率の增加

生産に從事する人々に産業上の自治權を與へて、これに依りて勞働者の人格的解放と生産能率の增加とを計り、以て彼の官僚の誇るエフィシェンシーを凌駕し、併せて國民生活を向上せしめようとするのである。

㈢ 四民平等の社會

適材を適所に用ゐる方策を講じ、殊に門閥や富を廢して專ら實質的技能に因る人物の登用を計り、且つ、男女の不平等なる待遇を根本的に改造するものであつて、各人は初めより平等なる地位と機會とを與へらるゝのである。

㈩ 文化に關する計畫

教育、藝術、道德、其の他あらゆる國民生活の精華を民衆的なもの、及び民衆の到達し得る制度とするに存する。一國のバイタリティーは要するに其の國の文化が民衆本位なるや否やに依りて判斷さるゝを以て、デモクラシーの文化に關する計畫は、凡べての民衆化を實現し得る程度のものとなつて居る。

其の他、國際的計畫や共產主義的計畫や又は無政府主義的計畫等もデモクラシーの建設的計畫に含まれるであらうけれども、國際的計畫に就いては第三章を參照せられたく、また無政府主義等に關しては各國其の共通的性質を缺くを以て、玆には省く事とする。

要するに、デモクラシーの主張は主として『各個人の地位と機會との平等及びこれらの保障する一切の施設』を要求するのであつて、其の爲に凡べてを各個人の手卽ち民衆に還して、更に新なる民衆の積極的活動を開始する運動であるやうに思はれる。

七、デモクラシーの合理的道德的基礎

合理的道德的の意味

私は人生の目的を個人人格能力の自由發現にありと考へるので、社會的には『平等なる各人格の自由發現』となるべきであると前章に述べたが、この『平等なる各人格の發現』を實現するには、社會生活に何等かの客觀的標準がなければならぬと思ふ。卽ち各人が調和して進み得る或る社會的原則とでも稱すべきものが必要なのである。

歷史的に謂へば、時代々々に依りて、其の內容こそ異なれ、社會生活の存する處には必ず或る種の調節原理があつた。而してこれは『公正』と云ふ言葉に依りて表はされたのである。

かのプラトンは國家生活の目的は『公正』を建てるにありと論じた。こ

れと同じ意味の事を日本支那の人々が云うて居る所より觀れば『公正』なる觀念は全人類的性質を有するのであり、而して社會生活は、今日に於いてもこの『公正』を建て、各個人の自由發現を保障し、之を調節する目的を持たねばならぬものと考へて差支へあるまいと思はれる。

然らば『公正』なるものは何處より來るかと謂ふに、今日にありては之は決して政府の定むるものではなく、政府は唯公正の仲介者若くは一部分の執行者たるに止るのである。公正の源泉は、其故に、之を他に求めなければならぬが、私は『公正』は各個人の人格に内在する合理的觀念であつて、社會的に發現しては客觀的存在をなし各人の利害や主張を綜合する一致線若くはシンホニーの如き各人格關係の調節點となるのであると考へる。

想ふに、生活は常に思想や利害の衝突を生ずる。而してこれは社會が合理性の主觀的發現とも云ふべき自覺せる個人を多く有すれば有する程其の衝突の程度を增すものなるが故に、隨つて社會生活調節原理としての『公正』は時代と倶に其の内容を異にする事となる。これ進化的事實の證明する所であつて、今日の『公正』は少くとも、各個人若くは各階級の綜合的利害及び思想の相互作用より來る相互の同情的了解と云ふ二つの内容を持たねばならぬ。加之、上述の如く『公正』は各人格に内在する調節原理なるを以て、人格の進化につれて『公正觀念』も進化する事となるのである。

今、便宜の爲に『公正』を定義すれば、

『公正とは社會生活の發達、卽ち、社會化と個人化とに於ける各思想乃至

利害の衝突を合理的に調和する條理なり』となる。

私は最初『合理的道徳的』なる言葉の意味を述ぶるところであつたが、この『公正』こそ『合理的道徳的』の全内容であると思はれる。何故ならば『公正』は要するに各人格間の合理的調和線と觀らるゝからである。

果して然らばデモクラシーの合理的道徳的基礎は『公正』の原則に叶ふや否やに依つて定まるべきものであつて、デモクラシー（殊に最近時に於ける）は大體次の諸點に於いて『公正』なりと私は觀察する。

㊀相愛的精神。かのベトーベンは自分の宿痾より苦しめられて、唯だ死のみが自分より自分をレリーズすると悲しんだけれども、而も自分と同じ運命にあるもの、絶望的狀態を察してやると、自分が一生懸命人間らしい仕事をして、兎に角最後の日まで戰ふ事は、同病者を慰め之れを奮勵する所以であると感じて必死の努力をしたと謂はれて居るが、これはデモクラシーの相愛的精神の發現である。

㊁人性信頼。トーマス、ジェファソン等は人性信頼を力説したが、苟も人を愛し人格を尊重する人々は、この主張を公正なりと考へるであらうと思ふ。殊に信頼は責任を伴ふに於いてをやである。

㊂個人を絶對的目的なりと主張する點。カントやベンタムの云へる如く、デモクラシーは『個人其れ自身が目的なり』と說くのであつて、これは個人を自重せしめ自尊せしむる意味に於いて公正なりと觀ぜられる。

㊃各個人の創造性を解放して之を同價値とする點。社會は要するに

シンホニーの如く各特異性を含む人格の集團なるを以て、個人の創造性を各人格の社會的發現として、之に同價値を附するは公正なりと考へられる。何故ならば公正は一面人格的調和を意味するからである。

(ホ)富其の他の物質を手段に過ぎぬものとして、人格を高調するは公正に合する。

(ヘ)男女の平等(地位と機會との)を主張する點。且つ競爭に代ふるに協力を以てする點。

(ト)各人の能力を功利して全體の幸福を增進する點、科學的に謂へば進歩なるものは各人の特異能力發現より來るものにして、心理的には各個人のみが進歩の原動力となる。

(チ)地位と機會との平等を求めて不合理なる現狀の一部分を打破せんとする點。これ人格解放の實際的方法の一つである。

(リ)民衆政治なるを以て、個人の判斷に意義あらしめ、隨つて人格と智慧とを高むる點。また所謂國士政治を斥けて各人乃至各團體の綜合主義を高調する點。

(ヌ)民衆政治(今日の)は參政權の擴張を伴ふ。而して參政者の增加するに隨ひ、權力は人道的となる點。

(ル)輿論の尊重、少數者の判斷よりも、多數者及び各團體の綜合的意志は公正に叶ふ。

(ヲ)凡べての社會制度にして有用なるものは存置して之を民衆的コント

ロールの下に置く點。かのエキスパートはこの意味に於て民衆化されるのである。

(ワ)一切の手續をなすに先づ衆意を尊重して行ふ點、デモクラシーは目的と手段とを倶に選ぶ。殊に各種團體の意志を綜合して手段を定める。

(カ)權力を分配して一部の專制を防ぐ點。

(ヨ)階級的利益の主張、今日の社會生活は經濟的には各階級の利害の衝突を意味して居る。而してこれは各階級が同樣に主張する限り公正であつて、寧ろ之を主張しないのが不公正であると思ふ。

(タ)各階級の自治的主張、各階級が自治を主張すると云ふ事は、精神的には物質より人格を解放する第一歩である樣に考へられる。

(レ)教育及び其の他の制度を各人の爲めにすると云ふ點。從來の宗教や教育は主として或る階級的利益のために支配されて居つたのを、今度は各人の爲に解放するのである。

(ソ)民衆(各人)の手に一切の源泉を置くを以て責任は各人に歸着する。其れ故に各人は凡べての責任を免るゝ事は出來ない。これデモクラシーの社會には連帶責任が必然的に存在する理由である。

(ツ)自覺せる民衆の自動的活動は人性の可能性を『公正』に隨ふものなりと立證する點。これ人格の自由發現を意味するを以てである。

(ネ)各人が眞に自由なる生活を享樂し得る點。物質より解放せられ且つ平等なる地位と機會とを有する各個人は、かのノラ(人形の家)が叫べる『雲一

の交り（Communion）』を自由になす事が出來る。こゝに至れば人生は崇高なる美の世界となるのである。

デモクラシーは、かくの如き合理的道徳的基礎を有するものであると私は思ふが、併しながら、其の中には餘りに理想的なものもないではない。

社會進化は人性の改造を條件づけるものであるから、或は遠い理想と思はれるものが、案外早く實現さるゝかも知れぬ。けれども今日の社會乃至今日の個人の實力で、何處迄これが實行を觀るかは問題であつて、私は、寧ろ、デモクラシーの實現には、今日の處種々なる弊害と困難とが隨伴すると觀るを穩當なる見解となすべきであるまいかと考へる。

八、デモクラシーの實際的困難

最近時のデモクラシーは、主張としては大體『公正』の原則に叶ふものであるが、實行上の困難は國に依りては決して樂觀を許さぬものが存する。今これを順次に述べんに、

(1) 各個人は生物學的遺傳を有するが故に能力に差がある。今これを等閑視して、各個人に平等なる位地を與ふることとなれば、勢ひ有能者を奬勵せぬ結果となるかも知れぬ。これ曾てアリストテレスや、米國のカーフン等が比例的平等說を立て、着實に社會生活を進めんとせる一理由である。

(ロ)人間の性質は必ずしも信頼する事は出來ぬ。これは日常の出來事で判るのである。

(ハ)デモクラシーは社會のベスト、プレーンを使はぬ恐れがある。隨つて社會進歩を阻み、デモクラシー其のもの、進路を妨げるのである。

(ニ)デモクラシーは自然的優秀者を嫉みて、之を引き落す恐れがある。

(ホ)デモクラシーは各人の利己主義に惡化する事がある。かゝる時には多くの人々は積極的努力も人類奉仕もしなくなるのである。

(ヘ)デモクラシーは經濟と能率とを失ふ惑れあり。これ米國中央政治に現はるゝ所である。

(ト)デモクラシーはデモクラシーを奉ずる階級を造る恐れがある。

(チ)各階級間の交渉が動とすれば鬪爭的となる。

(リ)少數者を壓迫する多數の横暴若くはモブ、ルールとなる恐れあり。

(ヌ)多數と云ふ美名の下に煽動的政治家及び私利を逞うする徒が社會政治を犠牲にする恐れあり。

(ル)今日の政治はデモクラシーの政治も然らざる貴族政治も、俱に少數者の發議に依る少數の政治であつて、少數者は或は多數を名とし、又は或る權力を權として天下つて居るに過ぎぬのである。其れ故にデモクラシーを行ふ事となれば、國に依りては難事共の敗亡を可能ならしむる少數政治となる恐れがある。これ佛蘭西のソレルがデモクラシーを嫌惡する所以である。

(ヲ)デモクラシーは各個人の自由發展を不可能ならしむる恐れあり。これ横暴政治の弊害であつて、米國の或る人々が『米國よりも露西亞(舊)に自由の光りあり』と謂ふのは少數者に操らるゝ多數政治が平等なる各人の自由發展を保障せぬからである。

(ワ)惡文化、民衆文化は動もすれば價値の低下を馴致する。これは教育や藝術等に殊に現はるゝのである。

(カ)デモクラシーは生産力を減少せしむる恐れあり。これ極端な例ではあるが、ボルセビキの弊害であつて、或る人々がデモクラシーは生産能率を増加すると主張するは、實際上の事實でないと觀ぜられる。但し自覺せる民衆を有する今後のデモクラシーは左樣でないかも知れぬ。

要するにデモクラシーの實際的困難は政治的には各方面に於けるエフィシヨンシーとエコノミーとの調節如何と云ふ點であつて、經濟的には生産力增加の問題、社會的には積極的努力及び奉仕的精神との調和、また文化的には價値の下落に關する問題に存する。

隨つてデモクラシー實現の任に當るものは、熟く如上の困難を充分に了解して之が矯正に力むると同時に、民衆の要求に同情し民衆を通じて公正に叶ふ自己の理想を行ふ達觀的政治家か然らざれば智慮ある民衆其れ自身でなければならぬ。

而して、凡べてのものは終に其の本源に還へる如く、デモクラシーの利益も缺陷も俱に民衆に歸着するものなるを以て、デモクラシーのサルベー

ションはデモクラシー其れ自身が爲さねばならぬと覺悟し、責任ある行動に出づべきであると思ふのである。

○結論

人間は、かのバートランド、ラッセルが提唱する如く一種の創造的衝動を有するものである。何事かを爲さねばならぬと云ふ衝動（インパルス）は絶えず個人を驅つて社會的活動を爲さしむるのであるから、古代より今日迄人類社會の存在する限り、人類は動いて來た。而して個人自覺の程度高まるに及んでは、平等なる各人の自由活動を欲するに至りて、茲にデモクラシーの時代思潮を產んだのである。

欠

デモクラシーの新波であつて、これに対抗しつゝある現代人の協力生活がある。これこそデモクラシーの希望がかゝつて居るのである。

主なる参考書目

1. Wyel; New Democracy.
2. Croly; Progressive Democracy.
3. Hobson; Democracy after the war.
4. Tufts; Our Democracy.
5. Michels; Politische Partie.
6. Mallock; The limits of Pure Democracy.

畢

7. Lecky; Liberty and Democracy.
8. Angell; The British Revolution and the American Democracy.
9. Giddings; Responsible state.
10. Dewey; Democracy and Education.
11. Duguit; L'Etat.
12. Ritchie; Natural Right.
13. Russell; "Political Ideals."
    "Why men fight."
    "Roads to Freedom."
14. Lippman; Preface to Politics.
15. Wallas; "Human nature in Politics."
    "The Great Society."
16. Durkheim; "De la Division du Travail Social."
17. McDaugall; "Social Psychology."
18. Griggs; "The Soul of Democracy."
19. Tufts; "The Ethics of Coöperation."
20. Sellars; "The next step in Democracy.
21. Spargo; "Bolshevism."
22. Marx and Engels; "Communist Manifesto."
23. Cole; Self-Government in Industry."

24. Carpenter; "Towards Industrial Freedom."

25. Follett; "The New State."

大正八年十一月十九日印刷
大正八年十一月廿二日發行

定價金四拾錢（デモクラシー）

著者　高橋清吾
發行者　荒川信賢　東京市小石川區音羽町四丁目十一番地
印刷者　渡邊八太郎　京市牛込區榎町七番地

日清印刷株式會社印刷

不許複製

發行所　東京牛込早稲田　振替東京一二三番
早稲田大學出版部

デモクラシー目次

緒言（デモクラシー研究の必要）……一
一　デモクラシーの語原と古代希臘の實際政治……七
二　近世デクラシーの通俗的意味……一九
三　近世デモクラシーの學術的意味……二九
四　古代デモクラシーと近世デモクラシーとの差違……四六
五　近世デモクラシーの起原及び其の發達……五五
六　近世デモクラシーの定義及び其の主張……八八
A　デモクラシーの定義……八八
B　デモクラシーの主張……一〇〇
（一）理論的主張……一〇〇
（二）デモクラシーの建設的計畫……一〇四
七　デモクラシーの合理的道德的基礎……一〇九
八　デモクラシーの實際的困難……一一九
結　論……一二四

電車シーリーズ

世界改造叢書

毎冊金四拾錢　郵税貳錢

（新刊）

△教育の改造……中島半次郎述
△勞働問題……北澤新次郎述
△戰後の經濟問題……法學博士　平沼淑郎述
△デモクラシー……高橋清吾述
△人種問題……侯爵　大隈重信述

（近刊）

△異民族の統治……江木翼述
△普通選擧……關和知述
△ボリシエビキー……片上伸述
△婦人問題……宮田脩述
△國際聯盟……内ヶ崎作三郎述

8.12.12

389
16

終